

# ケンブリッジ大学図書館蔵 「アストン和書目録」について (1)

虎 尾 達 哉

## 1. はしがき

標題の目録はケンブリッジ大学図書館日本部門 (Aoi Pavilion) 架蔵の *Catalogue of W.G. Aston's Collection of Japanese Books* を便宜かく訳したものである。筆者は1999年10月および2002年9月の二度に亘って、本目録を実地に調査する機会を得た。小稿はその両度の調査の報告を行い、あわせて本目録がアストン研究の重要な資料たることを明らかにせんとするものである。上記の調査に際し、筆者に対して種々便宜を与えられたケンブリッジ大学図書館ならびに同館司書・小山騰氏にこの場を借りて深甚の謝意を表したい。また、初度の調査行では、実践女子大学より在外研究中の佐藤悟氏の高配も忝うした。記して、感謝の誠を捧げる。

## 2. アストンの略歴

本目録の書誌については後述するとして、ここではまず、その編者であるアストン (William George Aston, 1841-1911) について、主として楠家重敏の労作 (「W.G. アストン日本関係年譜 (1864-1932)」『イギリス人ジャパノロジストの肖像』所収, 1998年, 日本文芸社) に依りつつ、概略を述べておくこととしたい。

サトウ (Ernest Mason Satow, 1843-1929), チェンバレン (Basil Hall Chamberlain, 1850-1935) らと共に英国の先駆的な日本学者として名高いアストンは、1841年アイルランド北部のロンドンデリー近郊に生まれ、ベルファストのクイーンズ・カレッジ (現 Queen's University) およびその修士課程で古典や現代語、現代史を学んで学士・修士の学位を取得した後、1864年、文官任用委員会の採用試験に合格。在江戸英国公使館の日本語通訳生 (Student Interpreter) に任用

され、楠家によれば同年秋または初冬、生涯の盟友となるサトウに2年遅れて日本の土を踏んだ。これはサトウら他の日本学者についても同様であるが、アストンもまた、来日以前に何ら日本語教育を受けた形跡はない。

以後、アストンは実地において日本語の習得に努めながら通訳としての公務を果たしてゆくが、語学は天賦の才に恵まれていたらしく、短時日のうちにこれを自家薬籠中のものとし、早くも1869年2月には掌編ながら日本語入門書として、『日本口語文典』(*A Short Grammar of the Japanese Spoken Language*)を刊行、また1872年には文語文について『日本語文語文典』(*A Grammar of the Japanese Written Language with a Short Chrestomathy*)を上梓するまでに至る。かように古今の日本語に通暁したアストンは、1872年に在日英国人を中心に創立された日本アジア協会(Asiatic Society of Japan)を主たる拠り所として、日本の言語、文学、歴史、宗教等について数多の論考を発表し、日本学者としての地歩を着々と築いてゆく。

他方、公人としてのアストンは、通訳生の後、通訳兼翻訳官(Interpreter and Translator)、補助官(Assistant)、日本語書記官補(Assistant Japanese Secretary)と徐々に昇進し、1880年には兵庫領事代理(Acting Consul at Hiogo)として神戸に転出、また1884年には朝鮮総領事(Consul-General for Korea)として京城に赴任する。当時英国は朝鮮半島の政治経済動向に注意を向けており、その要請もあって、アストンは在日中より、サトウとともに朝鮮人の下で朝鮮語の習得にも努めていたが、彼はここでも天賦の才を遺憾なく発揮し、語学的才能では人後に落ちぬサトウもアストンには一籌を輸したという。ちなみに、アストンは「日本語と朝鮮語の比較研究」(*A Comparative Study of the Japanese and Korean Language, Journal of Royal Asiatic Society, vol.11, 1879*)のごとき朝鮮語関係の論考も著している。

さて、朝鮮総領事として在任中の1884年12月、金玉均らによる甲申政変に遭遇し、かねて蒲柳の質であったにもかかわらず、厳寒の戸外に難を避けねばならなかったアストンは、肺に病を得て急遽神戸に搬送。休養後も帰任することなく、再度在日公使館に勤務することになるが、体調すぐれず、1889

年6月、ついに職を辞して帰国し、イングランド西南部のデヴォン州ビアー(Beer)の地に妻と共に隠棲する。そして、1911年11月の死去に至るまでの22年間、この温暖な保養地で、日本学関係の著作に専念することになるのである。アストンの名を高からしめた『英訳日本書紀』(*Nihongi:Chronicles of Japan from the Earliest Times to A.D.697*, 1896), 『日本文学史』(*A History of Japanese Literature*, 1899), 『神道』(*Shinto:The Way of the Gods*, 1905)の三部作を始めとする重要な著作のほとんどは、実はこの時期に著されたものであった。

### 3. アストンの蔵書と和書目録

アストンの日本学についての多彩にして旺盛な著作活動を支えたものがその膨大な蔵書であったことは疑いない。本節では先ず、ピーター・コーニッキー、林望共編『ケンブリッジ図書館所蔵和漢古書総合目録』(*Early Japanese books in Cambridge University Library, Cambridge University Press*, 1990年、以下EJCULと略す)に依りつつ、アストンの蔵書について述べておきたい。古今の日本語に通暁したアストンは公務の傍ら古書肆を渉獵して写本・版本・活字本を問わず、和書の蒐集に努めた。これには同じく和書蒐集家であったサトウの影響が大きかったと思われる。実際、サトウとともに京都の古書肆を漁ったことがサトウの日記(1881年11月12日条)およびサトウのアストン宛の書簡からも知られる(1881年11月29日付)。また、アストン、サトウ、チェンバレン、さらにはディッキンズ(F.V.Dickins, 1838-1915)らは、互いの日本研究の便宜のため、しばしば蔵書の交換や貸与を行っていたが、サトウに至っては、1884年バンコク赴任のため離日するに際して、自身の日本への関心が薄れたためか、その膨大な蔵書の多くをチェンバレンに無償で譲渡し、さらに残りを1892年にアストンに貸与している。貸与といっても、サトウが返還を求めた形跡はない。ばかりか、アストンに対しては、のちにその書簡の中で、かつてチェンバレンに譲渡した蔵書はアストンに譲るべきであったと悔いているほどである(1908年11月5日付)。かくして、アストンは自身で入手したものの他に、

サトウより貸与(事実上譲渡)されたものを含めた膨大な蔵書約1900点9500冊をビアーの自宅に有するに至るのである。

やがて、これらの蔵書は1912年11月、アストン死去(1911年11月)の一年後に至って、ケンブリッジ大学図書館(Cambridge University Library, 以下CULと略す)によって購入されるのであるが、これは生前アストン自身がサトウの勧めを受けてCULに譲渡を申し出ていたことを機縁とするものであった。ただ、アストンが譲渡についてCULと成約する以前に死去したため、無償譲渡ではなく遺産管財人による廉価(250ポンド)での館への売却という形をとったものである。なお、サトウは先述のように貸与分についての返還は、これを求めなかったと思いが、EJCULは、ケンブリッジへの蔵書譲渡をアストンに勧めたこと自体に、サトウが貸与分に対する積極的発言権を保持していたと見ている。しかし、これはやや穿ち過ぎではなかろうか。この点はのちにふれることとしたい。

さて、その死後CULに売却されることになる膨大な蔵書について、アストンは生前、目録を作成していた。いうまでもなく、小稿が紹介する目録がそれである。以下、本目録の書誌的な事柄について述べることにしたい。

本目録は現在、タテ約40.4cm、ヨコ約30.5cmの大部・重厚な洋装本2冊として、ケンブリッジ大学図書館日本部門の書庫に架蔵されている。両冊の扉にはそれぞれペンで“Catalogue /of/ W.G.Aston's Collection/ of/ Japanese Books”と五行に分って書名が書かれ、その下に一冊には“Volume 1/ A1-1081”, 他の一冊には“Volume 2/ B1-897”と内容が2行分ち書きで表示されている。扉を開けると、以下目録本文となるが、これは書物一点ごとにその書名・著者・刊行年・書誌・内容等を英文でペン書きしたタテ約6.5cm、ヨコ約20.2cmの紙片を用箋として、台紙1枚につき5枚ずつ貼り付けた体裁となっている。貼付は台紙の表のみで、裏にはない。用箋は通計2000枚弱にも及ぶ。これらのペン書きがアストン自身によってなされたものであることは、彼の特徴的な筆記体から明らかであるが、Vol. 1の冒頭貼付の用箋には“Nota bene”(ラテン語で覚え書き)で始まるアストンの署名入りの識語(後掲)があり、

これらの用箋が1908年8月にアストンによって書き上げられたものであることが知られる。

ただし、本目録が現在のように洋装本2冊に仕立てられたのは、アストンの蔵書がCULに入った1912年の6月～7月のことである。Vol.1扉左下隅の“Slips mounted and bound in 2 volumes / June-July, 1912”の注記がそのことを示している。無論、扉に記されたこの注記も先の書名もともに貼付・製本時にCUL側によって書かれたものである。したがって、1908年に書き上げられた夥しい紙片が当初アストンによってどのような形態で保存されていたかは不明というほかない。もっとも、アストンは後にふれるように、これらの用箋に書かれた目録をただ自身の便宜のために作成したのではなく、後世に残すことを目的として作成したことは明らかであるから、CULがこのような形に貼付・製本したことは、アストンの本意に幾分なりとも沿うものであったとあってよいだろう。

ここで、先にふれたアストンの識語を引いておきたい。

#### Nota bene

This catalogue is imperfect. Especially as regards the Buddhist books. It requires a thorough revision by a competent native Japanese scholar. The names of persons are often only guessed at and must be frequently wrong.

W. G. Aston

Aug. 1908

一読して、アストンの学者としての謙虚な姿勢が窺われよう。「人物名（著者名）についてはしばしば当てずっぽうであり、間違いも多いはず」と述べているのは、例えば、『朝鮮事情』の著者、榎本武揚を“Enomoto Takeage”と記している（ただし、アストンはそこでは慎重に？を付している）類のことを指しているのであろう。あのアストンにしても、人名の読みはしかく難解であったかと微笑ましくさえ思われる。

それはさておき、この識語で注意したいのは、アストンが「有能な日本人学者による徹底的な校訂」を望んでいる点である。すなわち、アストンはこ

の目録が人目にふれることを明瞭に意識し、より完璧な目録となることを希求していたと理解されるのである。この目録が自身の便宜のために作成されたものであるなら、いかに学究肌のアストンとはいえ、かようなことを敢えて識語に書くことはすまい。否、そもそも識語を書き付けることもなかったであろう。この識語と校訂希求の文言こそは、アストンがこの目録を後世に残すことを目的として作成したことを雄弁に物語っている。それでは、何故アストンは自身の蔵書目録を後世に残そうとしたのか。

実はアストンがこの目録を作成した1908年は、例えようもない悲しみが彼を襲った年であった。この年の1月、アストンは36年連れ添った妻ジャネットを肝臓癌で喪うのである。当時、盟友サトウはやはり外交官生活から退き、ピアーから車で1時間ほどのオタリー・セント・メリー (Ottery St. Mary) に居を構えていたが、ジャネットの死の直前、エクセターの病院に彼女を見舞ったとき、余命2・3時間もないと知らされ悲嘆に暮れる (in deep distress) アストンの姿を日記に書き留めている (「サトウの日記」1908年1月7日条)。サトウにとっても、ピアノの名手であったジャネットは音楽を共通の趣味とする「かけがえのない友人」 (an invaluable friend) であったが、そのサトウによれば、アストン夫妻は「強い絆で結ばれた大変仲の良い夫婦」 (a very attached and happy couple) であったという (同上)。ジャネットを喪ったアストンの悲しみはいかばかりであったか。

1909年5月、アストンのもとを訪れたサトウの目には、アストンが「去年会った時よりははるかに元気そうに見えた」が、論文についてアストンは、「いろいろ頭に浮かんでくるが、気力 (the necessary energy) がなくなってしまって、うまく書けない」とこぼしたという。アストンは気力の喪失を持病の肺病に帰した (以上、「サトウの日記」1909年5月26日条) が、無論そればかりではあるまい。

1908年1月に妻に先立たれ、かねて子を儲けることもなかったアストンは、年来の持病に苛まれながら、論文執筆への気力を喪失する一方で、恐らくは自らの余命の短からんことを悟り、無慮2000点にも及ぶ蔵書の行く末を案じ

たのであろう。そして、死後しかるべき機関に寄贈しようと考え、その準備の一として、目録の作成に取りかかり、さらには、これは憶測に亘るけれども、その寄贈先について盟友サトウに相談したのではあるまいか。もしそうであるとすれば、それはアストンの蔵書にサトウからの貸与分が多く含まれていたことから自然な成り行きである。1910年のサトウによる CUL への無償譲渡の勧めは、EJCUL がいうがごときサトウのアストンへの貸与分に対する積極的発言権の行使ではなく、むしろ寄贈先選定についてのアストンの依頼に応えたものではなかったか。

その寄贈をめぐる経緯はともかく、1908年8月成立の本目録は孤独の身となったアストンが、将来の蔵書の寄贈に備えて書き上げたものであることはまず疑いない。しかも、失意の中にあったアストンではあったが、将来の蔵書利用者の便を図って多くの情報を盛り込もうと努めたことが如実に窺われる。実例をもって示そう。

(1) Vol.1 A7

Muninjima Danwa by a Satsuma doctor

1797, 1 vol. M.S. 10 1/2 × 7

An account of the Bonin islands. Illustrated.

(2) Vol.1 A97

Haikai Shichibu shiu

N.D. about end of 17<sup>th</sup> century. 7vols 6 1/4×8 1/2

A collection of Haikai poetry - See Aston's Hist. of Jap. Lit. p.289

すなわち、(1)では、『無人島談話』について、著者が薩摩の医者であり、1797年に著された一冊本の写本(M.S.)であることを記され、その法量をインチで示したのち、内容が小笠原諸島(Bonin islands)の説明であること、また挿絵付きであることを述べている。また、(2)では、『俳諧七部集』について、刊行年不明(N.D.=No Date)としつつも、17世紀末と推定し、冊数・法量を記し、その内容を俳諧を集めたものと説明した上で自著『日本文学史』の参照

箇所まで明示している。いずれの記載も極めて簡潔であるが、情報量は決して乏しくはないことが知られよう。とりわけ、アストンが本目録を通して挿絵(illustrated)の所在を一々注記していることは注目される。いうまでもなく、アストンのようなごく僅かな例外を除く多くの人々にとっては、直接視覚に訴える挿絵こそが日本の事物を知る唯一の手がかりであったからである。アストンの配慮が窺われよう。

かように、本目録が将来の蔵書利用者の便を図ったものであることは明らかであるが、その字体は多くの場合、ほとんど走り書きとってよい。これは、本目録がアストンにあっては識語にも記されているように「不完全な」(imperfect)あくまでも草稿であり、「有能な日本人学者による徹底的な校訂」を俟って完成すべきものであったことによるのであろう。もっとも、そのような日本人学者はアストンの生前はもとより、死後もたえて現れることはなかった。

#### 4. 本目録の構成と成立過程

本目録が1912年のCULによる貼付・製本によって、洋装2冊本に収められたものであることは既に述べたが、その冊立てはアストン作成の目録紙片約2000枚がA・Bに分類されていることに拠っている。すなわち、Vol.1は左上隅に大きく“A”と書かれ、1から1081までの通し番号が打たれた用箋が貼付・製本され、Vol.2は左辺中央よりやや上に“B”と書かれた1から897までの用箋が収められている。

ところが、このA・B表記は仔細に見ると、やや趣を異にすることに気づく。その位置が異なるだけではない。A表記の方はいずれも判で押したように変化に乏しいまったく同じとってよい字体で書かれているのに対し、B表記の方は用箋によって字に精粗や濃淡が認められるのである。しかも、その精粗・濃淡は各用箋の目録本文の精粗・濃淡と完全に一致しているのである。翻って、A表記の方は目録本文の精粗・濃淡とは全く一致しない。以上の観察結果からすれば、A表記は、各用箋にその個々の目録事項が記される



